

平成26年度業務計画書

I. 業務の内容

1. 業務の題目

新しい科学コミュニケーションの探索

2. 担当フェロー

佐倉 統

3. 業務の目的

ここ10年で科学コミュニケーション活動が活発になり、その主体や形態の多様さが増している。科学カフェなど研究者と社会の距離を近づける試みが定着し、大型研究プロジェクトにアウトリーチ活動が義務づけられるようになるなど、一定の成果はあげてきたといえる。しかしその一方で、科学技術系のコミュニケーション・イベントの参加者の多くが「科学技術に関心が高い」「文化資質が豊富」な人たちにしか届いていないという指摘や、科学コミュニケーション活動の目指す方向が明確でないという批判などもなされている。

これらの経緯と現状を踏まえ、当研究では科学コミュニケーション概念の整理と枠組みの再検討をおこない、科学知と社会知の接する領域における活動を、新たな科学コミュニケーションの様態として位置づけ直し、これからの科学コミュニケーションのあり方を提示することを目標とする。

この目的を実現するため、これまでの科学コミュニケーションの経緯、社会における科学技術の位置づけを再考し、「伝える」科学コミュニケーション、「つくる」科学コミュニケーションという枠組みでは取りこぼされて今までの科学コミュニケーションでは注目されてこなかった分野に焦点をあて、科学技術の興味の潜在層に向けた、より有効な科学コミュニケーションの領域と手法を探る。これらの分野が科学をどのように取り入れ、使いこなしているかを探ることで、「科学知」や「経験知」にもあてはまらない「新たな知」のありようを浮き彫りにし、それらの知見を科学コミュニケーション全体に還元することが可能となるだろう。

4. 当該年度における成果の目標及び業務の方法

①科学コミュニケーションと日本社会のあり方に関する理論的枠組みの整備

従来の科学コミュニケーションは情報の伝達もしくは対話に焦点を当てていたため、その情報がどのように利用されるかについての配慮が十分ではなかった。しかし、3.11以後に科学や技術が社会から必要とされていながら、それらに十全に答える情報を専門家が十分発信できなかった状況を考慮すると、科学情報を日常生活の文脈で「使える」形にすることが重要である。そのためにここでは科学的知識の側とコミュニティの側の双方に焦点をあて、異文化コミュニケーションや平和構築学の理論と手法を参照しつつ、科学的知識や科学情報を日常生活の文脈やその他の文化で必要な知識に変換する方法を検討し、他方で日本社会が科学的知識に対してどのような感受性を持っているかを明らかにする。また、日本社会における専門的知識の扱われ方や意思決定の特徴を明らかにし、日本社会に適切な科学コミュニケーションのあり方を考察する。具体的な作業は以下のとおりである。

a. 理論的枠組みの構築

- ・異文化コミュニケーションおよび平和構築学を科学コミュニケーションの基盤理論とするための理論的作業をおこなう。そのために、科学コミュニケーションセンター内部の基礎系他ユニットとの連携をより濃密におこない、複数回の連携会議を行う。

b. ワークショップ

- ・基礎調査をベースに夏ごろを目途にワークショップを実施し、科学コミュニケーションの今後の戦略を多方面から掘り下げる。

- c. サイエンスアゴラ
 - ・上記 a. b. の結果をもとに、11月のサイエンスアゴラでシンポジウムを実施する。
- d. インタビュー
 - ・科学コミュニケーションセンター外部で科学コミュニケーションに関心をもっている方々へのインタビュー調査を行う。
- e. 日本社会の特性の抽出と国際化の模索
 - ・主に文献調査により、科学コミュニケーションに関連する日本社会の歴史的・文化的背景を抽出し、今後の科学コミュニケーションの方向性の検討に反映させると同時に、それらを踏まえた国際化戦略を考察する。

これらの作業を通して、科学者技術者への信頼を回復し、より健全な民主主義社会の実現に資する科学コミュニケーション理論の構築を目指し、その知見を第5次総合科学技術基本計画への素材とするべく検討を加える。